

「かながわ人づくりコラボ2024」の実施結果の概要

1 開催の趣旨

かながわ教育ビジョンについて県民の方々と共感と共有を図り、様々な主体との協働・連携による人づくりをより一層推進するとともに、より実効性のある教育施策の実現に資するため、かながわ教育ビジョン第6章に基づき、かながわ教育月間に合わせて開催するもの。

2 開催の状況

- (1) 開催形態 会場開催とオンライン配信を併用して開催
- (2) 日 時 令和6年10月12日（土）14：00～16：00
- (3) 場 所 県立総合教育センター 講堂
- (4) テーマ 知っていますか？先生の見えない魅力と苦悩
- (5) 参加者 【会場】194名 【オンライン】251名 【アーカイブ】563名※
【計】1,008名

(※ イベント終了後1ヵ月間のアーカイブ配信の視聴回数)

3 開催の内容

(1) オープニングアトラクション

今年度から、県内の高等学校による部活動等の成果発表を実施することとし、湘南高等学校合唱部が歌声を披露した。

TVドラマの劇中歌として使われた「いのちの歌」（作曲 Miyabi）と沖縄県宮古島の祭り歌である「狩俣ぬくいちゃ」（作曲 松下耕）の二曲を演奏した。無伴奏でありながら、手足を使った迫力あるボディパーカッションを用いたり、曲間では、それぞれの歌についての説明を行う等、観客を楽しませる工夫を凝らした演奏が行われた。



(2) 開会（神奈川県教育委員会 教育長 花田忠雄）

開会の挨拶として、「かながわ教育ビジョン」の理念に基づく取組、県民との教育論議の機会である本コラボの趣旨について話があった。その中で、教員志望の学生が全国的に減少している傾向を辿っていること、それに向けて県教育委員会は具体的な施策を検討していることについて話があった。



(3) 実践紹介

県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に勤務する教員が実際に業務にあたる姿や、それに関連するインタビューをまとめ、それぞれの校種の多忙な勤務実態や、魅力について示す動画を上映した。



◇動画出演者

- ・ 佐藤 宏美 氏(箱根町立湯本小学校)
- ・ 鍛代 浩美 氏(綾瀬市立綾北中学校)
- ・ 張江 雄司 氏(県立希望ヶ丘高等学校)
- ・ 大河内 渉 氏(県立岩戸支援学校)

(4) 教育論議

「生徒と教師の対話から考える、教職の魅力」をテーマに、各校種の勤務実態の紹介を踏まえながら、教職を目指す学生からの質問に、現場で活躍する教員が答える形で教育論議が行われた。

◇コーディネーター：高木 まさき 氏 (かながわ人づくり推進ネットワーク幹事長)

◇パネリスト 笠原 陽子 氏 (県教育委員会教育委員)

鍛代 浩美 氏 (綾瀬市立綾北中学校)

張江 雄司 氏 (県立希望ヶ丘高等学校)

平塚 斐女 さん (横浜国立大学大学院 2年次)

後藤 蒼一郎 さん (県立光陵高等学校 2年生)



○ 自己紹介

(張江 氏)

- ・ 大学卒業後に6年ほど役所で働いた後、教職を目指し、塾の運営スタッフとして働きながら通信制の大学に2年ほど通い教員免許を取得した。現在の勤務校は1校目で教員は6年目となる。担当教科は公民科である。

(鍛代 氏)

- ・ 神奈川出身、高校生まで地元の学校に通い、大学卒業後すぐに中学校の教員として勤務し始め、今年で12年目である。現在は中学2年の社会科を担当している。

(平塚さん)

- ・ 現在は大学院に所属、来年度から神奈川県の高校で働く予定である。私立高校、海外日本人学校での勤務経験がある。教職大学院では、今までのキャリアを振りかえり、これまでの経験や知識を整理するとともに、更なるスキルアップのため、主に教科教育について学んでいる。

(後藤さん)

- ・ 以前から教職に就くことを考えている。高校を選ぶ時に、学習に関する取組が充実している光陵高校を受けることに決めた。高校選びの理由の一つである、「教職基礎・教職基礎演習」について説明したい。(スライドを用いて説明)



(笠原 氏)

- ・ 県内の小中学校の教諭を経て、教育行政に関わり、玉川大学の教職大学院で教員を目指す方の指導をしてきた。現在は、教師教育リサーチセンター、独立行政法人教職員支援機構(NITS)玉川大学センターで研修の講師を行っている。

先ほどの動画からわかるように、現場では、それぞれ児童・生徒と向き合い、いい授業を行う為に工夫をして業務にあたっている。共通して笑顔で、元気に生徒に接している。皆の熱意が伝わった。

(高木 氏)

- ・ 教職関連の調査結果から、教職を選ぶ人は、高校までに教員になると決めており、それまでにモデルとなる教員と出会っていることが多い。先生方が笑顔で、熱意をもって生徒と接することは、非常に大事なことである。
- ・ これ以後、後藤さんと平塚さんからの質問に、登壇するお二人の先生が答える形で論議を進める。質問は4つの視点で行う。会場の皆様からもご意見を頂きたい。



○ 視点1「学生時代に教職に就くために行っていたこと」

(後藤さん)

- ・ お二人が学生時代に教職につくと決めてから、そのために行っていたことは何かあるか。また、これから教職に就くことを目標としている学生が、教職に就くまでに行った方が良いことはなにか。

(張江 氏)

- ・ 社会人になってから教職を志したので、教職のためにやってきたということは少ない。後から振り返ると色々なことが役立っているとは感じている。まずは選り好みせず色々な経験すると良いのではないか。

(鍛代 氏)

- ・ 「教員になるため」に意識して行ったことは「教員免許状を取得する」ことくらい。教員になると決めてからは、教科の勉強をひたすらした。

二つ目は「学校で指導するため」に学ぶのではなく、教科について、より深く学ぶことだ。生徒に対して、なぜその教科を学ぶのか、その教科の魅力を伝える意識で、アンテナを高くして勉強するとよいと感じている。

(笠原 氏)

- ・ 『良い教師を全ての教室へ』という本に「教えることは複雑だ。」という一節がある。専門的な教科に関する知識を自分のものにして、様々なことを関連させて子どもたちに接していく。その為には、自分の目で本物を見ていくこと、自分の心で感じる場面を積極的に持つこと、自分で理解し、物事を理性で判断できるようにすることが大事である。

皆さん自分たちが子ども達に関わることによって、影響を与えていると言っていたが、影響を与えるのだから責任を持たなければならない。子ども達に教えるのだから教師は色々な知



識を得たり、経験をする必要がある。一生の中で基礎的基本的なところに関わることは重要なことであるということを知ってほしい。

(高木 氏)

- ・ 教師になった時に、もっと勉強しておけばよかったと思ったことが思い出された。幅広い考え方を学ぶとするなら、大学時代に多く友人をもつこと、本を沢山読むこと、そういった事が大事だろう。

○ 視点2「学校現場の人手不足に関すること」

(後藤さん)

- ・ 教員の人手不足によって、教員一人当たりの仕事が増えてしまう傾向にあると報道されている。勤務先での教員の勤務実態と、お二人が「教員の人手不足」や「教員の働き方改革」について何かお考えのことがあれば伺いたい。

(張江 氏)

- ・ 中学校に比べると退勤時間は著しく遅くはない。運動部や吹奏楽部といった部活の顧問だと、プラスαで平日や土日の対応が多くなる。退勤時間がそれほど遅くないから問題ないというわけではない。ほとんどの教員が、授業準備やクラス運営などに対して、十分に時間を割けていない。教員の仕事への満足度低下ということもあるが、生徒に対して提供できる価値が少なくなっていると言えるので、働き方改革は今後も続けていくべきだ。



そういった状況をふまえ、教員はもっと分業すべきである。政治経済のキーワードの一つに「分業」というものがあり、一人で様々なことをするよりも、色々な人と役割分担しながら進めた方が早く終わるし質も上がるということである。

学校でも、もっと分業を進めることで授業の労働時間も短くしたり、授業の質を高めたりできるのではないかと感じている。提供できる価値の大きさや労働時間短縮の視点で考えれば、こうした方が良いと思うが、全体の兼ね合いで実施できないことも多いし、教職経験の浅い先生は単独で1科目受け持つことに不安をもつこともあるだろう。そうした場合は、複数教員で1つの科目を受け持つことになるが、その場合でも同じく分業の考え方は活かせるだろう。

(鍛代 氏)

- ・ 私が勤務する学校にも、産休、育休の職員がいる。そういった場合、臨時で代わりの先生に勤務いただくが、私の学年は副担任の先生が他の学年よりも少ない状態である。過去に年度途中で、代わりの先生が必要になったが、なかなか見つからないこともあった。そうなれば、職員でその分の仕事を分担することになる。授業以外の仕事も多く分担するので、少しずつ生徒に影響が及んでしまう。

例えば、行事前日のホームルームだと、大事な確認事項を伝えたり、生徒から質問があったときに対応したりする必要があるが、その時、関わりが少ない先生が対応するのでは、生徒は不安になってしまう。



お互いに顔と名前、そして相手がどんな人間かを分かって接することが重要と考えているので、教師なら誰でもいい、というわけにはいかない。人手不足の影響が1番出るのが、生徒と関わることであると感じている。それが上手くいかなければ、生徒対応が必要になり、業務が増えることになる。

生徒が安心して学校生活を送るためにも、教員が余裕を持ち、生徒と十分なコミュニケーションをとることができる環境を整えることが働き方改革につながると考えている。

(笠原 氏)

- ・ 小学校、中学校、特別支援学校は仕事のしかたが違う。それぞれに合った形で分業を進めたい。小学校は校内研修が盛んであり、授業研究会で作成した教材を共有するようなこともあった。しかし授業について、先生方はそれぞれにこだわりがあるし、授業は生徒との関係性の中で作るものなので、共有した教材をそのまま使うことはできない場合もある。
- ・ 神奈川県は平成24年度から勤務実態を改善するため毎年度基本方針を策定していたが、なかなか改善されなかった。平成29年度から県立学校と各市町村立学校に対して勤務実態調査を行った。

県立学校教職員の働き方改革に係る懇話会が作られ、その中で実態に合わせて方針を定めて、各種の具体的な施策を行ってきた。できることを速やかに行っているが、人やお金のことは時間がかかることがある。まずはできることからみんなで取り組み、それを積み上げて、改善が目に見えるようになれば、徒労感もなくなるだろう。教育長から明確な目標をもって働き方改革に取り組むと発言もあり、若手PTからの意見や提言を取り入れようとしている。できることから速やかに、各現場で取り組み、行政としてすべきことが上手くかみ合ってくると思う。



(高木 氏)

- ・ 学校現場を外から見ていて、数年前は現場は大変だという印象があったが、学校に対する配慮をするようになったし、夏休みに教員の確保もされるようになったと感じている。あるカウンセラーが、忙しさに追われると、子どもを見る目が大人目線で見られなくなってしまい、上手くコンタクトが取れなくなると言っていた。働き方改革は子どもの為でもあるので、今後も進められていくだろう。

○ 視点3「スキルアップに関すること」

(平塚さん)

- ・ 教職に関することで、日々スキルアップの為にしていることがあるか。また、日々多忙であると思うが、もし一定期間、スキルアップの為に何をしてもいい、

という期間が与えられたらどんなことをしてみたいか。
(張江 氏)

- ・ 教員は直属の上司がないので、成長しつづけるのは難しいように思う。まずは毎授業後に振り返りを行うことが基本である。忘れないよう改善点を見つけたら、スマホのメモ帳に入力している。

子どもができてから以前に比べて読書時間が取れていないため、知識のインプットのためにクルマでの往復の通勤時間中にニュースや討論番組を聞いたり、スタディサプリで政治経済の授業を聞いたりもする。

もし時間の制約がなくなれば、教職大学院で授業方法などを研究したい。教職単位は通信制での取得のため、改めて全般的に学びなおしたいし、一から修業したい。ちなみに県の大学院派遣に応募したが落ちている。

(鍛代 氏)

- ・ 日々行っているスキルアップといえば、教科内容について、自分が事前に調べて、教科書以上の知識を入れるようにしている。具体的にはインターネットで最新の情報を調べたり、図書館に行って関連する資料を調べている。その時に、「中学校 社会科の授業」の範囲に留めるのではなくて、高校でどのように教えているのかも調べている。場合によっては、他教科の内容に及ぶようなことを調べて、授業に臨むようにしている。

一定期間時間が作れるのなら、海外に行って、教科書に出てくるものの実物を見たい。数年前、ポーランドのアウシュビッツを訪問した。現地で遺跡や遺品の実物を見たことで、生徒に伝えたいという思いがより強くなった。地理でも、実際に気候や現地の生活を体験すると、授業での伝え方も変わってくる。他にも、時間が許せば他の科目の免許を取ることに興味がある。

(笠原 氏)

- ・ 平塚さんは教職大学院でどのようなスキルアップをしているか伺いたい。

(平塚さん)

- ・ 授業力の向上が目的である。様々なことを学んでいるが、一度現場を離れることで、新たな視点で見直すことができている。知識だけでなく、実践もともに身につけたいと考えてスキルアップに励んでいる。

(笠原 氏)

- ・ 令和の日本型学校教育に対して答申が出され、総合教育センターも変わっている。大学の講座を紐づけて、先生方が望むスキルアップに答えられるように多種多様な引出しを提供できるよう変わってきた。先生方の課題意識を解決できるような研修があったり、長期研修員制度や教職大学院への派遣や日常的に研修の場を広げられるような引き出しを総合教育センターで提供している。

授業は生徒の様子を見ながら瞬時に判断して展開させていくが、そう簡単な



ことではない。また、現在多様な事情を有する生徒に対し、どれだけ適切に対応できるかということもとても大事である。新たな課題に対応できるよう努力しながら、子どもたちの前に立つということが大事である。

(高木 氏)

- ・ いい授業をしたい、授業を通して子どもと一緒に楽しみたいとなれば、自然とやらなければいけないことが見えてくると思っている。研修のメニューは揃っているのだから、様々な方法、機会があるだろう。また、授業の振り返りは重要である。

○ 視点4「教職を続ける理由」

(平塚さん)

- ・ 最後に、お二人が教職を続ける理由、モチベーションはなにか。

(張江 氏)

- ・ 役所時代と比較すると、役所時代もやりがいある仕事をさせてもらっていたが、サービスの提供先が遠くにいるため、自分の仕事がどのように影響しているのかを想像しなければいけない。一方で、教職はサービスの提供先が常に自分の目の前にいて、その子たちの変化を直に見続けられるので、やりがいを感じやすい。

また、自分が大切だと感じたことをそのまま生徒に伝えられるということ。もちろん、組織の決定と自身の意見が異なり、生徒に自身の考え通り伝えられないということもあるが、その割合はずっと少ないので、自分が大切だと思ったことを伝えられることはありがたい。

(鍛代 氏)



- ・ 子どもが成長する姿を間近で見られるということに尽きる。幸運なことに、これまで担任を持った学年は、入学から卒業まで3年間持ち上がりである。卒業前に異動することも多いので、3年間を通しての成長をみられることはありがたいことだと思っている。

日々の授業の1時間の中でも、「できるようになった。わかった。」「おもしろいな。」と、普段より興味をもって話を聞いているということはすぐわかる。自分が努力した内容で、生徒が関心を持ち、楽しんでくれるとそれがモチベーションになる。

(笠原 氏)

- ・ 総合教育センターホームページに「教職の魅力を考える」というコーナーがある。「子どもたちとのつながり」「子どもの成長、変化に接する」という言葉が随所に出てくる。教職を続ける理由はそこにあると、つくづく思った。

教職大学院で教師を目指す方の指導に携わり、「学ぶとはどういうことか」「先生方に何かを教えるとはどういうことか」を考えることは大事であると感じているが、簡単に答えが出ない。答えが出ないから、何とか答えを見つけようと、そのプロセスでいい出会いがあることもある。先生になっている人を研修する立場になって、改めて教師という仕事の大切さとその魅力を多くの人に伝えた

いという気持ちになっている。

○ 参加者との意見交換

会場及びオンラインの参加者から、意見や質問を募集した。



【質問 ①】

教員経験者にお聞きしたい。今思えばいい思い出、いい勉強と思えるが、当時は辛くて、先生を辞めたいと思ったような出来事はあったか。

(張江 氏)

- ・ 辛い経験はある。私はバスケットボール経験者だが、10年以上競技から離れていたため、部活動指導の際に、どう指導すべきかわからず、生徒も不満を持ち悪循環に陥った時があった。

生徒と関わる時、教員はいいところしかなるべく見せないようにしているので、そのギャップで教職を嫌になる人もいるかもしれないと思う。どの仕事も辛いことは当然ある。

(鍛代 氏)

- ・ 辞めたいと思うことはなかったが、今より小規模の職場で、一人当たりの受け持つ業務が多く、本当に大変だった。整理して見通しを立てないと周囲に迷惑をかけてしまうと必死だった。また、部活動の生徒と上手く関係を作れない時はきつと思った。そういった事があっても、「ありがとう」と言って卒業していった生徒が多い。私も生徒に助けられたな、という思いがある。

(平塚さん)

- ・ 辞めたいと思うほどの出来事はなかったが、初めに勤務した学校で大変な思いをした。生活指導に力を入れている学校だったが、自分が未熟であることもあって、担任を持った際に苦労した。特に、2年生の担任であった時が一番大変だった。一度始めたことは、やり切りたいという思いがあり、生徒たちと向きあって課題解決したいと考えていたからか、卒業後に生徒から感謝の言葉をもらうことができた。一緒に成長できた実感も得られたのでいい思い出である。

(笠原 氏)

- ・ 私は最初小学校に勤務し、その後中学に移ったが、生徒指導が困難な学校だった。自分のクラスの子どもたちはしっかり育てることはできたが、小学校では生活指導を行うことはなかったため、最初受け持ったクラスでは大変な思いをした。生徒に落ち着きがなくて、立ち歩きをしまい授業にならない時もあったが、最後送り出す時には「あのときはごめん」と言ってくれるようなこともあった。

(高木 氏)

- ・ 国語の教師だが、静岡出身なので、経験はなかったがサッカー一部の顧問を担

当した。大変な思いをしたが、今、彼らに感謝している。

【質問 ②】

教職を目指す学生が減っているが、教職を目指す高校生が教職に期待していること、あるいは不安に思っていることはどのようなことか。

(後藤さん)

- ・ 先ほどの質問が自分の思うことである。他には、良い授業というところが気になっている。ICT機器を用いる場合もあれば、黒板に板書するのを生徒がメモをとるような授業もある。生徒はより良い授業、受けて楽しめる授業を求めている。

(高木 氏)

- ・ より良い授業をできるか気になる、ということだが、先ほどの話のように研修やスキルアップの場が様々あると思う。先輩の先生方などに、こういった風に支えていただけるとか。

(笠原 氏)

- ・ 先生は授業スタイルであるとか、大事に思うところはそれぞれだとは思いますが、学校は学校教育目標をたてて、職員が一つになって取り組んでいくのが組織のあり方としては大事であり、その中心は何かというと、授業である。授業を通して子どもたちが充実するために、管理職も含めたミドルリーダー、総括の方々がいらっしやる。そういった方々を中心に、意識的に生徒たちの不安を取り除くようにスキルアップをしながら、生徒に思いを伝えていくことが大事である。

(高木 氏)

- ・ 最後に一言だけ、生徒に対して心掛けていることがあれば、という質問への答えを、まとめの言葉としていただきたい。

【質問 ③】

生徒と接する際に、心掛けていることはあるか。

(張江 氏)

- ・ 生徒はそれぞれみんな一生懸命生きているということは意識している。それを理解できていなかった時は失敗が多かった。

(鍛代 氏)

- ・ 生徒が充実した学校生活だったと思えるよう、授業等を頑張りたい。

(後藤さん)

- ・ 先生になったら、生徒とのより良いコミュニケーションを心掛けたい。

(平塚さん)

- ・ 私は楽しむことを意識している。教員が楽しまないと生徒も楽しめない。

(笠原 氏)

- ・ これまで「子どもの心の命と体の命を守る」ということを柱として様々な取り組んできた。県教育委員として仕事をするうえで、この言葉にもう一つ「先生方の心の命と体の命を守るために、今の仕事を全力で頑張る」と付け加えたい。

(高木 氏)



- 実践の映像も含め、神奈川県でご活躍されている先生方と、教職を目指している方と今までにない企画ができた。様々な角度から教職について考えるきっかけをご提示できたと思っている。

(高校生司会の感想)

- 教員だった祖父母は、楽しそうに昔学校で大変な思いをした話を聞かせてくれる。今日、現在の先生方の話を聞いて改めて先生の大変さや、やりがいを再認識した。

先生は生徒と距離や関係性が近いので、先生が生徒に与える影響は大きい。自分の進路も影響を受けている。この先どんなに技術が発達しても、AIに先生の代わりはできないし、人間味のある仕事だと思いながら、楽しく聞かせていただいた。

- 自分は中学校の時、周囲のことが気になってしまうところがあり、学校が苦手だった。小中学校に通う生徒にとって、家と学校が社会そのもので、学校が苦手だと居場所がないと思込みがちである。そういった人達の声をSNS等で多く見る。今回、実践紹介と教育論議を聞いて、先生方は生徒のことを考えてくれていると実感した。自分も過去、先生からの声掛けで「自分はここにいるんだな」と思うこともあったし、席替えの際に先生から配慮してもらったこともあったと思いだした。



▲司会：
県立神奈川総合高等学校
辻野さん、堀口さん

(5) 閉会 (かながわ人づくり推進ネットワーク 幹事長 高木まさき)

閉会のことばとして、会場・オンラインともに多くの方に参加いただいたことに対する謝辞、冒頭のオープニングアトラクションに出演した湘南高校合唱部への謝辞、自らの経験や知見に基づいた、わかりやすい話をいただいた登壇者への謝辞に加え、全体を通して共通していたのは、学校では、子どもの成長を目の前で直接実感できることに喜びを感じられるということ。学校は子どもの成長はも



ちろんのこと、教師自身も成長できる、成長する過程で児童、生徒に対して感謝できる場でもある。単に与えるばかりではなく、もらうものが大きいくらい、そのための苦勞であれば苦勞も厭わないという思いで先生方は勤務しているということではないか、との話があった。

また、かながわ教育ビジョンに掲げた理念の実現に向け、かながわ人づくり推進ネットワークと県教育委員会とが車の両輪となって、この人づくりコラボの場を活用しながら、県民の皆様との共感、協働、連携を確かなものとしていきたいとの話があった。